

## 東北地方太平洋沖地震 第3報 声にならない子どもたちの心の声を聞く

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

子どもたちのための民間の国際援助団体(NGO)社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(理事長:上野昌也/理事・事務局長:渋谷弘延、以下 SCJ)は、3月11日14時46分に東北・三陸沖で発生した地震東北地方太平洋沖地震直後に緊急支援チームを立ち上げ、13日、千葉県旭市に現地調査に入りました。

旭市は、人口約7万人のうち18歳未満の子どもが約1万おり、現在約1500人が小学校や公民館間での避難生活を余儀なくされています。旭市役所によると、来週火曜日から学校が再開を予定しており、避難民は避難場所の移動を始めています。初動調査では、子どもたちは、水、清潔なトイレを求めており、お風呂に入りたい、たくさん人がいて落ち着かない、など慣れない避難所生活での生活に困惑している様子でした。

避難所で会った子どもたちの声をお伝えします。

### ◆福祉センターに避難していた兄弟(小2・中3)

弟: こんなに大きな地震は生まれて初めてだったからびっくりした。

兄: 地震が起こったとき、授業中だったこと意外思い出せない、、、。

避難所は友達がいるから楽しいと答える弟の一方で、兄は非常に疲れた表情で、家が全壊してしまったので、どうなってしまうのか非常に不安を感じている、と今後の生計について心配していました。

### ◆小学校に避難していた姉妹(小6・中2)

妹: 地震が起こる前、海へ行こうとしてたけど、友達の家遊びに行くことにした。

おじいちゃん私が海にいますと思って助けに行ってしまったのですごく心配した。

(その後、再会できたそうです)地震後の避難所ではぐっすり眠れた。

姉: 地震が起こった時は、部活をしている生徒と教室にいる生徒がいたが、自分は教室にいたので、グラウンドに避難した。疲れているのに眠れない。

彼女たちは、その後も、津波と余震警報で家に変えたり避難所に戻ったりを繰り返しています。

私たちは、年齢や性別、家庭の環境によって、子どもたちの心の状態は違います。また、おとなたちが混乱した状況の中で、子どもたちは言いたいことを言えない現状があります。こうした表面化しない子どもたちの声に留意しながら、丁寧に子どもたちの声(心)に耳を傾けることを最優先しています。

そして、こうした子どもたちの声を、ぜひ正しく報道していただきたいと願っています。